

2013年(平成25年)10月13日 日曜日

「歴史掘り起こし活用を」

琉球弧文化
観光シンポ

パネリストが活発に意見交換

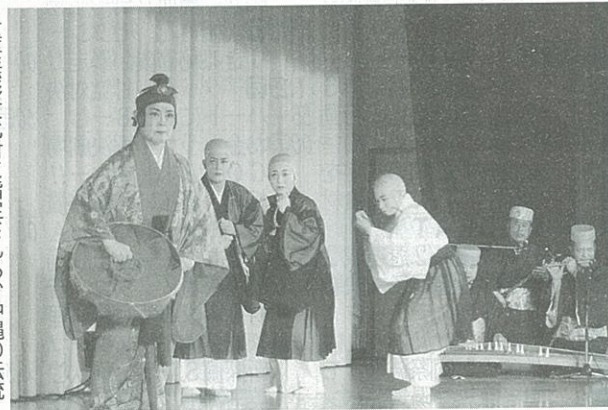
「組踊」など伝統芸能披露も

琉球弧文化観光シンポジウム(同実行委員会主催)が12日、奄美市住用町の奄美体験交流館で開催された。沖縄と鹿児島島の識者がパネリストとして参加し、奄美を含む3地域の文化や観光のあり方について活発な意見を交わした。また地域を代表する伝統芸能の披露もあり、終日盛り上がった。

イベントは「奄美群 琉球文化圏にある奄美 認と、鹿児島県本土を」いる。この日は会場に島復帰60周年記念事 が、世界文化遺産登録 含め、今後の経済文化 用意した300席は満 業の一環。沖縄と同じ) に向けた協力体制の確 の交流発展を自指して 席。立ち見も出るほど



各パネリストが提言を述べた「これからの文化観光のあり方について」



重要無形文化財に指定される、沖縄の伝統芸能「組踊・執心鐘入」が披露された

にぎわった。

伊津部小学校・さざ波バンドのオープニング演奏の後、第一部は基調講演を行い、▽鹿児島純心女子短大非常勤講師・小川学夫氏(伝統芸能について)▽琉球大学・津波高志名誉教授(伝統文化について)▽隼カルティベート・開梨香社長(観光について)が参加。各自意見を述べた後、デイス

カッション「これから文化観光のあり方について」を実施した。奄美の八月踊りの成り立ちについて小川氏は「海で神を招き、集落にその力を分け与える儀式」と考え、津波名誉教授は「地域信仰や文化背景を盛り込みながら奄美らしい文化を伝えなければならぬ」と強調する。また、沖縄の有人島29カ所のエコツーリズムに取り組んだ開社長は、児童の体験交流事業を受け入れた集落の活性化を

実例に上げ、主体的行動を伴った地域の取り組みを訴えた。

今後の奄美について3人は「リビーターは人(ガイド)とのつながりを重視」「歴史の掘り起こしと活用」などの提言を述べた。

第2部の芸能披露では、国の重要無形文化財に指定される、沖縄の組踊「執心鐘入」(尋芸能塾)が披露された。琉球王朝時代を舞台に女性の恋心を表現した内容で、寺の住職や小坊主の軽妙な演技や、

女が鐘から飛び出て鬼に変化する演出に注目が集まった。

そのほか、児童らが躍動し演奏する「創作エイサー」(那覇太鼓や10人以上の鬼が力強く和太鼓をたたき、末吉鬼神太鼓(鹿児島)に家族連れやお年寄りの連は熱中前山真吾さんの島唄や地元住用町川内集落約40人が参加した八月踊りで盛り上げ。最後は全員で六調を踊り、ハトが鳴り大きな拍手が贈られるなかイベントは幕を閉じた。